

ヴィルヘルム・ミュラーのユダヤ人女性との恋愛に基づく作品から

著者名(日)	渡辺 国彦
雑誌名	研究紀要
巻	31
ページ	133-154
発行年	2007
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00000856/



ヴィルヘルム・ミュラーの ユダヤ人女性との恋愛に基づく作品から

渡 辺 国 彦

1794年10月7日にデッサウで生まれたヴィルヘルム・ミュラー (Wilhelm Müller) は、この比較的小さな家族的な雰囲気のある都市で、仕立屋の息子として甘やかされて成長した。他の多くの兄弟達が早くこの世を去ってしまったこともあって、両親はヴィルヘルムに一身に愛情をそそぎ、最後の子を失う不安からか罰を与えることさえもしなかった。ヴィルヘルム・ミュラーの最初の伝記を書いた Gustav Schwab の言葉を借りれば「彼の教育はあらゆる強制からかけ離れていたため、自分で何をするかという選択はほとんどすべて、この子どもの気分にゆだねられていた。」¹ 宗教に関しては、この北ドイツに位置するのんびりした雰囲気のある都市では、家庭でも学校でも典型的なプロテスタントの教育が行われていたことを疑う必要もあるまい。1815年のミュラーの日記には、日曜日に家庭内礼拝がおこなわれたとの思い出がのっている。「食事の後、父親は、日曜の使徒書簡と日曜の福音書 (die Sonntags-Epistel und Das Sonntags-Evangelium) を読んだ。」² とある。しかし、ミュラーの神との関係がいつまでも平安であり続けたわけではない。彼はたびたび神に反逆し神との新しい関係を築いた。そのような時にミュラーの作品には、しばしばユダヤ人女性が登場する。『ブリュッセル・ソネット』(Brüsseler Sonette 1814年成立)、『ヨハネスとエステル』(Johannes und Esther 1819/20)、『デボラ』(Debora 1826/27年成立)の三つの作品がその代表的な例である。これらの作品が成立したのは、ミュラーの19歳から32歳までである。したがって彼の作家としての創作活動のすべての時期に渡っていることになる。

ミュラーの覚書によると『ブリュッセル・ソネット』は1814年8月8日にブリュッセルで成立した (Philip S. Allen によるミュラーのはしり書きの解説)。ミュラーの最初の作品といってもよいが、ミュラーの生前は発表されず、初版は1902年の Philip S. Allen による『ドイツ文献学ジャーナル』IV、「ヴィルヘルム・ミュラーの未出版ソネット」(Unpublished Sonnets of Wilhelm Müller; The Journal of German Philology IV) まで待たなければならなかった。

ミュラーは、1812年7月にベルリン大学に登録して古典文献学、ドイツ文学、近代英語な

1 Gustav Schwab: Gedichte von Wilhelm Müller, F. A. Brockhaus, Leipzig, 1837, S. XX.

2 »Wilhelm Müller Werke« Fünf Bände Herausgegeben von MARIA-VERENA LEISTNER Mit einer Einleitung von BERND LEISTNER, Verlag Mathias Gatz, Berlin, 1994. (以下 WMW.) Bd. 5, S.28.

どを学ぶ。おりしも、ナポレオンのロシア敗北の知らせが届くと、学生たちは先を争って学業を放棄し義勇兵として戦いに参加した。ミュラーも 1813 年 2 月に 18 歳でナポレオンに対する解放戦争のために義勇兵として入隊し、Lützen, Bautzen, Hanau そして Kulm 近郊の戦いに参加した後、プロイセン軍と共にブリュッセルに移動した。そこで彼は、周囲からは歓迎されない恋愛にかかわる問題をひきおこしている。1815 年 10 月 7 日にベルリンで書き始めた日記には、「1 年前、僕はブリュッセルで誕生日をすごした。僕は自分でもどうだったか余り覚えていない。でもその日に僕は手紙を書いた。その手紙は僕と父にたくさんの涙を流させることになった。」³とある。ブリュッセルで除隊になり、1814 年 11 月から 12 月にかけて人生と世の中に絶望しつつ冬の野を歩いて故郷のデッサウに戻った。あたかも後に『冬の旅』(Die Winterreise) の一節で「ところで今、世の中はこんなに陰鬱で / 道は雪で覆われている」⁴ (Nun ist die Welt so trübe, / Der Weg gehüllt in Schnee.) と表現した光景さながらであっただろう。同じように『冬の旅』で「夕焼けから日の出までに / 幾人もの人(頭)が老人(白髪)になった」⁵ (Vom Abendrot zum Morgenlicht / Ward mancher Kopf zum Greise) とあるように、彼には、「あたかもそれ以来、子供から老人にあるいは老人から子供になったかのような」⁶ (... , als wäre ich seitdem von einem Kinde zum Greise oder von einem Greise zum Kinde geworden.) 変化だった。

ミュラーは 1815 年 1 月から大学での勉強を再開するためにベルリンにもどるが、そこで記された 1815 年 10 月の日記にテレーゼ (Therese) という名前がでてくる。このテレーゼがブリュッセルでの恋愛の相手だ。この女性についての具体的な資料は、他にはいまのところ発見されていない。追放されるように隊を去る原因となったこの女性が、はたして本当にユダヤ人であったのかは、確実な証拠が残っていない以上あくまで推測にすぎない。しかしこの女性には、『ヨハネスとエステル』のエステルあるいは短編小説『デボラ』のテオドラ、すなわちデボラ (Theodora = Debora) というふたりのユダヤ人女性と多くの共通点を見いだすことができる。

このテレーゼとの恋愛に関係したいわゆる『ブリュッセル・ソネット』(Brüsseler Sonette) は、Philip S. Allen が、出版の 2 年前にミュラーの息子 Max Müller の遺品から発見したのだ。いつもは出版に積極的なミュラーではあるが、このソネットを出版することはしなかった。当時としては、公にすれば社会的に糾弾されることが確実な神や体制を真っ向から否定する当時としては過激な内容や表現の過激さのためでもあるだろう。また自らの不名誉なスキャンダルをわざわざ作品のかたちで世間に必要以上に広める気にはならなかったのも当然であろう。だがこの事件は彼の脳裏に焼き付き生涯忘れることもできないものであり、このソネットはその残されたほとんど唯一の記録でもある。この公表するつもりもなく、記憶から消し去りたがってい

3 WMW., Bd. 5, S. 9.

4 WMW., Bd. 1, S. 170.

5 WMW., Bd. 1, S. 177.

6 WMW., Bd. 5, S. 9.

た事件に関わる9つのソネットをミュラーが生涯の間破棄しなかったことも注目に値する。このソネットで扱われているテーマは、幸福なときもそうでないときも常にミュラーが関わり続けたものであり、『ヨハネスとエステル』や『デボラ』は当然のこととして、『美しき水車小屋の娘』(Die schöne Müllerin)や『冬の旅』などの主要な作品にも直接的にあるいは間接的に大きな影響を与えている。

ソネットは「オレステス」という題の詩で始まる。

1. オレステス Orestes

僕の信仰は死んだ！ 追放され、見捨てられ、 Mein Glaube tot! Verstoßen und verlassen,
僕は僕の人生を地球の果てまで背負わなければならない、

Muß ich mein Leben durch die Erde tragen,
誰の耳にも僕の苦しみを訴えることができない。 Kann meine Schmerzen keinem Ohre klagen,
いつか死ぬときにさえ僕は黙って血の気をうしなっていかなければならない。

Im Tode selbst muß stumm ich einst verblassen.

僕は何の悪行も犯さなかった、 Ich habe keine Missetat begangen,
信念だけを持って、僕は行動し、 Mit Überzeugung nur hab ich gehandelt,
恥ずべき行為に変えられてしまった。 Und zum Verbrechen hat man's umgewandelt
永遠の呪いは僕にぶら下げられたのだ。 Und hat mit ew'gem Fluche mich behangen.
僕はひとりの母親を殺した。 Ich habe eine Mutter hingemordet,
ああ、その母親の愛しい名前を僕に尋ねないでくれ。

O fragt mich nicht nach ihrem süßen Namen,
僕をただひとりでさきへさきへと行かせてくれ。 Laßt mich nur einsam weiter, weiter ziehen!
かつてフリア（復讐の女神）が荒々しく群がり Wie einst die Furien sich wild gehordet,
オレステスから安らぎを奪ったように。 Und dem Orestes seinen Frieden nahmen,
僕も、かけられた疑いから逃げなければならない。⁷

So muß auch ich vor meinen Zweifeln fliehen.

「いつか死ぬときにさえ僕はだまって……」とあるように、これらのソネットもまたそのもととなった事件の詳細も最期まで明らかにすることなくミュラーはその生涯を終えた。したがって、オレステスの母親殺しがミュラーの詩において具体的に意味するところも謎のままである。殺した母親とは今まで持ってきた信念の象徴かもしれないし、あるいはテレーゼに対す

7 WMW, Bd. 2, S. 271.

る愛が母親に対する愛に似たものであったのかもしれない。いずれにせよ、古代のオレステスが運命にもてあそばれたかのように、ミュラー見解に従えば、彼自身も望まぬ運命に翻弄された存在である。ナポレオンに対する解放戦争に義勇兵として参加した他の多くの学生と同様にドイツ的な信念と愛国心にあふれ誇り高く行動したはずであった。しかし気がつくと、『冬の旅』で「僕は旅に時を選ぶことはできない、自分で道を示さなければならない、この暗闇の中で」⁸ (Ich kann zu meiner Reisen / Nicht wählen mit der Zeit: / Muß selbst den Weg mir weisen / In dieser Dunkelheit.) とあるように、いつのまにか誇り高き行為は「恥ずべき行為」「犯罪」(Verbrechen) に変えられ、追放されるようについ先ほどまで“仲間”だと思っていた同胞の元を離れなければならない運命に陥っていた。自分に与えられた運命をさすると同時に、ミュラーは「僕の信仰は死んだ」といままで持っていた信仰への反逆を表明する。誰に訴えることもなく、「僕は僕の人生を地球の果てまで背負わなければならない、」とこの最初のソネットにおいてすでに、『永遠のユダヤ人』(1821年までに成立)と題する詩との類似性が示すようなある宗教的題材を想起させる表現がでてくる。

永遠のユダヤ人 Der ewige Jude

私は休み無くさまよう、 Ich wandre sonder Rast und Ruh,
私の道はどの目的地にも通じてない、 Mein Weg führt keinem Ziele zu;
私はどの国にでもよそのものだ、 Fremd bin ich in jedwedem Land.
そして至る所でだがよく知られている。 Und überall doch wohlbekannt.

心の奥深くで一つの言葉が響く、 Tief in dem Herzen klingt ein Wort,
それが私をひとつの場所からほかの場所へと追いやる、 Das treibt mich fort von Ort zu Ort;
私はそれを言わない、大きな声でも、小さな声でも、 Ich spräch's nicht aus, nicht laut nicht leis,
もし永遠の休息が褒美でも。 Sollt ew'ge Ruh auch sein der Preis.

...⁹

永遠のユダヤ人とは、いうまでもなく十字架を背負い刑場に行くキリストの休息を拒絶したため罰として最後の審判の日まで休むことなく世界をさまよう運命になったユダヤ人、アハスエルの伝説にまで遡ることができ、場合によってはユダヤ人すべてにこの罪を背負わす人種的な拡大解釈も存在することは、知られている通りである。ここでミュラー自身が永遠のユダ

8 WMW., Bd. 1, S. 170.

9 WMW., Bd. 1, S. 200.

ヤ人にたとえられるなら、何の罪を背負って永遠に沈黙を守り「よそ者として」さまよわなければならないのか。それは、所属する共同体に反する行動をおかしたことによる罪である。その結果はドイツ的言い方を換えればプロテスタント的な道徳や宗教から離脱を、そしてそれに支えられている共同体からの追放を意味する。ユダヤ人がキリスト教を中心とした社会から疎外されているのと同じことである。

[illegible]

10 WMW., Bd. 2, S.271.

な”市民のように自分でも良き信仰者であることを疑わないで「敬虔な偽善者として」生きることを拒絶し、「僕の神を僕は探さなければならない。」との決意を明らかにする。この表現も『冬の旅』において、「勇気」(Mut!)の「元気に世の中へ / 風やあらしに逆らって! / 地上に神がいらないのなら / 僕たち自身が神々なのだ」¹¹ (Lustig in die Welt hinein / Gegen Wind und Wetter! / Will kein Gott auf Erden sein, / Sind wir selber Götter.) と形を変えて再現される。

3 番目のソネットにおいても、『冬の旅』の「おやすみ」(Gute Nacht)における、「よそ者としてのはいり、よそ者として出て行く」¹² (Fremd bin ich eingezogen, Fremd zieh' ich wieder aus) との類似的表現を見いだすことができる。

3.

...

僕の人生の旅は僕を遠くに導く。 Und weiter führt mich meines Lebens Reise
よそ者としてさらにはるか、はるか遠くへ。¹³ Als Fremdling fort in ferne, ferne Weiten.

社会を拒絶した社会から拒絶される「よそ者」としての「僕」はキリスト教的共同体としての社会に居場所を見つけることができない。

4.

虎のように荒々しい爪で Dem Tiger gleich mit seinen wilden Krallen,
世の中は僕をその大きな腕で捕まえた。 Hält mich die Welt mit ihren Riesenarmen,
勝利か死か! ここには憐憫などない。 Sieg oder Tod! hier gibt es kein Erbarmen,
おまえか僕かどちらかが勝つかさもなければ死ななければならない。¹⁴
Du oder ich muß siegen oder fallen.

...

4 番目のソネットでは自己をとりまく世界を「虎」と関連づけて外部世界と自己との対決を表現する。「虎」は、オスマントルコに対するギリシャの解放戦争のさいに、オスマントルコの軍隊がおこなったギリシャの民衆への残虐な行為を非難するためにミュラーが使用した言葉でもある。1824 年 1 月にバイロンも義勇兵として参加したこの戦いでミュラーが叫ぶのは、異教徒によるキリスト教徒への迫害に抗議する声である。

11 WMW., Bd. 1, S. 185.

12 WMW., Bd. 1, S. 170.

13 WMW., Bd. 2, S. 272.

14 WMW., Bd. 2, S. 272.

高く積み上げられた死体の碑の周りに狼や虎たちが見える¹⁵

Und um das hohe Leichenmal sieht man die Wölfe und Tiger

アジアはその黄色い虎の輩を吐いた、 Asia hat ausgespitten ihre gelbe Tigerbrut,
そいつらは深紅色にそまってギリシャ人の子どもの血を飲んだ；¹⁶

Daß sie purpurroth sich trinke in der Griechenkinder Blut;

同じ表現がこのソネットにおいてはキリスト教社会に向けられ、キリスト教的道徳に基づく共同体への徹底的な戦いが勝利か死かと宣言されている。7番目のソネットにおいて、そのキリスト教徒の偽善性がより具体的に攻撃されている。

7.

日曜日の朝早く鐘がそうぞうしく鳴り響くと、 Wenn Sonntags früh die Glocken *laut* erschallen,
君たちは礼服でおめかしをする。 Dann schmückt ihr euch mit eurem Festornate,
なぜなら、ただこの日曜日の国だけで Denn nur in diesem sonntaglichen Staate
君たちは世間に気に入られたり、神に気に入られたりできるからだろう。

Könnt ihr der Welt und könnt ihr Gott gefallen.

それで君たちはミサと説教を聞くというわけだ。 So höret ihr die Messe und die Predigt,
長くてしばしば眠ってしまう時間の後 Bis nach der langen, oft verschlafnen Stunde
司祭の口から「アーメン」が鳴り響くまで。 Das ›Amen‹ tönet aus des Priesters Munde,
それできみたちの聖祭は終わる。 Dann ist eu'r ganzer Gottesdienst erledigt.

僕はいつでも静かな響きで Ich hör bei jeder Stunde *leisem* Schlage

僕の神の神聖な声が呼ぶのを聞く。 Die heil'ge Stimme meines Gottes rufen,

そして僕の小さな部屋の中で神について考える。 Und denke sein in meiner stillen Klausen,

君たちは神の呼び声をある一日にだけ聞く Ihr hört sein Rufen nur an einem Tage,

それから君たちは君たちの神殿の階段へと急ぎ、 Dann eilt ihr hin zu eures Tempels Stufen

君たちの教会の中で何も考えていないのだ。¹⁷ Und denkt an *nichts* in eurem Gotteshause!

ここで揶揄されているのは、日曜に教会に行きさえすれば自分は敬虔なキリスト教信者だと思っている信仰は見かけだけの偽善者達だ。自分たちは敬虔なキリスト教徒だと思いこみ、そ

15 WMW, Bd. 2, S. 227.

16 WMW, Bd. 1, S. 272.

17 WMW, Bd. 2, S. 274.

うでないものを異端者や無神論者として排斥する。ギリシャのキリスト教徒たちを見殺しにしたのもこれらのキリスト教徒なのだろう。偽善的な信仰に対する風刺はユダヤ人を揶揄した『簡単な改宗』(Leichte Bekehrung 1826年)という格言詩にも表現されているのと同じテーマである。

ユダヤ人は自分がキリスト教徒だと思っている、 Der Jude meint, er sei ein Christ,
自分が豚肉を食べただけで。 Wenn er nur Schweinebraten ißt.
彼にはキリストの秘儀なんか Er sieht von Christi Wunderlehr
多くのキリスト教徒にはもう見えていない。¹⁸ An vielen Christen auch nicht mehr.

この詩は簡単に改宗するユダヤ人に対する風刺のかたちを表面上とりながら、ユダヤ人から軽んじられる中身の無いキリスト教徒に対する皮肉が実質的な内容のようである。

9.

きみたちはしばしばあのうぬぼれた愚か者たちをあざ笑う。 Ihr spottet oft auf jene eitlen Toren,
あの愚か者たちは彼らの昔の高貴さの位で腹を膨らませて威張っている、

Die stolz sich bläht mit ihrem alten Adel,
彼らは、すでに騎士に恐れも非難もなく Die schon zu Rittern ohne Furcht und Tadel
濡れたおむつの中で選ばれている。 In ihren nassen Windeln auserkoren.
高貴さを自ら Nur wer den Adel selber sich errungen
深刻な戦闘や勇気ある危険を冒しながら手に入れたものだけが、

Durch ernstes Streiten und durch mut'ges Wagen,
父たちの高貴な名前を名乗るべきである。 Er soll der Väter edlen Namen tragen,
そのような者は新しい月桂樹で新鮮な気持でその名前を抱き寄せるのだ。

Den er mit neuem Lorbeer frisch umschlungen.
しかし君たちはあのうぬぼれたばか者たちにではない、

Doch seid ihr nicht dieselben eitlen Toren,
君たちの父たちの古い信仰に誇りを持っている。 Stolz auf den alten Glauben eurer Väter,
君たちは、あたかも自分自身でその信仰を得たかのように思っているのか。

Meint ihr, ihr hättet selber ihn errungen!
ゆりかごの中で生まれつきその信仰は君たちに生まれついたのだ。

Euch ward er in der Wiege angeboren,

18 WMW, Bd. 2, S.126.

君たちは人生の全てを無駄に祈るだけだ。 Eu'r ganzes Leben bleibt ihr müß'ge Beter,
君たちは決して心の鋭い剣を振ることはなかった。¹⁹

Die nie des Geistes scharfes Schwert geschwungen.

ナポレオンに対する解放戦争に参加してからブリュッセルに至るまでの出来事で不幸な恋愛だけがミュラーの絶望的な精神状態を決定したわけではない。実際に戦闘に参加した期間は短かったが、ミュラーは多くの仲間の死を体験したに違いない。とりわけ友人 Ludwig Bornemann の死は彼に相当な衝撃をあたえた。ミュラーは Borneman とは故郷デッサウで共に学んだだけでなく、ベルリンでの大学入学その後の軍務をも共にした仲だった。Borneman は、1813 年に Bautzen 近郊で戦死した。高貴さは自ら手にいれなければならないと危険もおかさず安穩とする世襲貴族にたいする怒りの詩が最期の 9 番目のソネットである。1816 年にベルリンで出版された 1813 年に作られた『最初の戦いの日の朝の歌』(Morgenlied am Tage der ersten Schlacht) に書かれている「フランス人の髑髏から我らは飲むのだ / そこでわれらのドイツの酒を / そしてヴィルヘルムの勝利の誉れを祝う / 詩人の古い歌で」²⁰ (Aus Franzenschädeln trinken wir / Dort unsern deutschen Trank / Und feiern Wilhelms Siegeszier / Mit altem Bardensang.) のナポレオンの軍隊に対する愛国的で好戦的な調子も、戦いの過酷な現実直面するうちに影を潜めるようになった。戦死するものは、常に前線の兵隊であり義勇兵である。権力者やその子弟は後方で安穩としている。詩の後半では、その世襲貴族をあざ笑う者が今度は嘲笑を受ける番になる。世襲貴族がその地位をなんの苦労もなく先祖から引き継ぐように、人々はその信仰を先祖から何の疑問も持たずに生まれた時に受け取る。信仰も獲得したものではなく、習慣としてあるいは都合の良いときに祈るだけで、人々はキリスト教的共同社会にしがみついてその恩恵を受けているのだ。

8 番目のソネットにおいて、

...

僕がいつかこの人生に別れを告げるなら、 Und wenn ich scheide einst aus diesem Leben,
この姿がもう一度僕のまわりに浮かぶだろう。

Dann mög dies Bild noch einmal mich umschweben,
僕の目が、僕の心が碎けるまで。²¹ Bis daß mein Aug, bis daß mein Herz gebrochen.

と表現されている。人生に別れを告げるときもういちど姿が浮かぶなら、言葉を換えれば恋

19 WMW., Bd. 2, S.275.

20 WMW., Bd. 1, S. 4.

21 WMW., Bd. 2, S. 274.

人の姿は死ぬまで忘れることができないということであろう。『冬の旅』においても「氷結」(Erstarrung)で、「僕の心は凍ったようだ、/彼女の姿がその中で凍りついている:/僕の心が再び溶けると、/彼女の姿も流れ去るだろう。」²²(Mein Herz ist wie erfroren, / Kalt starrt ihr Bild darin: / Schmilzt je das Herz mir wieder, / Fließt auch ihr Bild dahin.)と書かれている。『冬の旅』のミュラーの分身たる「私」の心も、死ぬまで凍ったまま溶けないであろう。『冬の旅』が結婚の幸せな時期に成立したからと言って、ミュラーの個人的な体験と『冬の旅』の内容は無関係だと判断するのは、いささか単純化のしすぎである。²³

ブリュッセルから逃げるように帰郷した後、2度目のベルリンでの生活が始まる。キリスト教的でドイツ的な社会に再び同化し、ブリュッセルでの出来事を忘れようと努力していた時期である。文学活動に熱心になり、最初のベルリンにおける生活で既に知合いになっていたヘンゼル家(Wilhelm Hensel)や『美しき水車小屋の娘』の原型になった劇の上演されたシュテーゲマン家(Stägemann)のサロンに頻繁に出入りするようになる。ミュラーは友人である画家ヴィルヘルム・ヘンゼルの妹であるルイーゼ(Luise Hensel)に官能的な愛とは無縁の汚れないマリア崇拝にも似た愛情を見いだそうとしていた。ルイーゼは、当時、敬虔主義を信仰し、後にブレンターノ(Clemens Brentano)に促されてカトリックに転向した女性である。ブリュッセルでの不幸な恋愛を後悔し、聖書を読み、ルイーゼへの精神的な愛に没頭する。だが、ブリュッセル時代の心の傷は本当に「すっかり克服した」²⁴のだろうか。

1815年10月7日の21歳の誕生日に、ベルリンにおける自分の新しい誕生を決意するかのようミュラーは日記をつけ始めた。しかし、1815年10月15日の日記にはすでにブリュッセルでのテレーゼ(Therese)の名がでてくる。

「……夕方、僕はルイーゼのリートの大部分を自分のために書き写した。この作業を終えた後、僕は机のところに行き、ブリュッセルでの愛ともっと昔のまだ僕に残っている思い出の品をながめた。僕はとても心を襲われた。かつての愛が再び目覚めてくるような気がした。特にテレーゼの巻き毛から僕に彼女の息が吹きかけられたように思われた時に。僕はその巻き毛に口づけをすることを抑えることができなかった。そしてあたかもテレーゼその人に口づけをしたかのように僕には独特のことだった。素晴らしい。けれども心は以前と同じ位熱く誠実に君のために、ルイーゼのためにあった。このことは天上での愛の一体化を指している。そこでは心が愛していると愛されているというひとつのことのなかで制限されていないのだ。僕たちは、僕らがこの地上で愛し合ったように、それからそこ(天上)でも皆が愛し合うようになるかどうか、…」²⁵

22 WMW, Bd. 1, S. 173.

23 Stoffels は、新婚生活の始まりの時期など悩みのない時期に『冬の旅』をはじめとする作品が書かれたのを謎として、その原因をミュラーの「病的な体質」にもとめている。Ludwig Stoffels: Die Winterreise, Verlag für systematische Musikwissenschaft GmbH, Bonn, 1987, S.95

24 WMW, Bd. 5, S.9.

25 WMW, Bd. 5, S.13.

ルイーゼのことを思いながら、いまだにブリュッセルから持ってきたテレーゼの巻き毛に口づけをする欲求をおさえることができない。ブリュッセルでの官能的な愛を完全に排除するのではなくルイーゼの天上的な愛とテレーゼの地上の愛とを観念の中でひとつにしようとする。1815年12月3日の日記には、「僕は今日もまた理由無く教会に遅れていった。すでに、悪魔が僕の中でより力をつけているように思える。福音書と使徒書簡を読むことも怠っている。僕はこのことを書くこともやっと一日たって考えた。」²⁶と記したかと思えば、その翌日には、「僕は昨日の福音書を使徒書簡と一緒に読み、強められたと感じた。特に使徒書簡の訓戒が僕を捕らえた。」²⁷とあるように、感情は毎日のように不安定に移り変わる。

ルイーゼに対する強力なライバルとしてブレンターノが出現するにいたって、キリスト教的でドイツ的な共同体への同化というベルリンでの生活の目標に行き詰まりを感じていたミュラーは、再び新しい道を踏み出す決心をする。プロイセン侍従ザック男爵 (Albert von Sack) からの2年間の予定でのコンスタンチノーブルへの学術旅行の申し出にしたがったのだ。男爵の旅の同伴者として1816年8月20日にミュラーは旅立った。ミュラーの最終的旅行地はローマに変更になり、男爵ともイタリアに着くとすぐに決別することになったのは、想定外のことであった。イタリアから帰りデッサウで勤務しながら創作活動を続け1827年にこの世を去るまでに、ブリュッセル・ソネットと関係が深い作品を2つ残している。言い換えれば、ユダヤ人女性との関係を基にした作品である。『ヨハネスとエステル』とこのイタリア滞在の体験が多く反映している『デボラ』である。

『ヨハネスとエステル』は、『旅する森の角笛吹きの手稿から77の詩』(Die Sieben und siebenzig Gedichte aus den hinterlassenen Papieren eines reisenden Waldhornisten) の中で『美しい水車小屋の娘』のすぐ後におかれ出版されている。1818年12月にイタリアからデッサウに帰郷。郷里であるこの町で教師兼図書館員として働き始めた時期である。イタリアから帰ると、キリスト教的かつドイツ的な社会への同化に対する過剰なまでの行動はなくなっていた。フランスに対する批判も影をひそめた。流行のようにカトリックに改宗するドイツの文学者たちおよび知識人に、厳しい目を向けるようになっていた。

Günter Hartung は、Heinrich Lohre が1927年に『ヨハネスとエステル』を『デボラ』と関連させて一定の解釈に導くことによって作品の評価をより困難にしたのだと主張している。「彼の生まれた町で『ユダヤ人地域の家をその後ろのシナゴークとともに』²⁸ 毎日目にしていた詩人は、自身子供の時ひとりのユダヤ人の少女を愛していた、そしてそのことが原因で一種のト

26 WMW., Bd. 5, S.46.

27 WMW., Bd. 5, S.46.

28 Heinrich Lohre: Wilhelm Müller als Kritiker und Erzähler, Ein Lebensbild mit Briefen an F.A. Brockhaus und anderen Schriftstücken. Leipzig 1927, S. 8f. und 94f., nach Günter Hartung. Günter Hartung: Müllers Verhältnis zum Judentum, in: Kunst kann die Zeit nicht formen, S.195, Berlin, 1996..

ラウマが残り、そのトラウマの痕跡が2つの作品に明確に認められるのだと。この仮定から出発し、より新しい研究論文はこの短編小説 (Debora) の作者にまさに『カトリック的伝道的傾向』と『ユダヤ信仰の弾劾』を下敷きにおいた；すでに Johannes チクルスは『ユダヤ人女性の自主的な改宗』をテーマにしていた；全体においてミュラーのユダヤ人描写は『啓蒙主義がそのために戦った信仰の寛容からの不幸な逆戻りを示している。』²⁹ ³⁰ というのが Lohre の説であり、それを発展させた Gad によるミュラーのユダヤ人差別は不幸にも増大していったという主張である。Lohre は、ミュラーのユダヤ人に対する感情を一時的な子供時代の体験に還元し、Karl Förster によって伝えられているミュラーの発言「ある友達のユダヤ人女性に対する恋愛関係が取り扱われている」³¹ をミュラー自身の偽装とみなした。1927 年になって、ようやく初期の版が公開された。その初期の版の冒頭にかかげられた献辞において「エステル。5つのリートを僕の友人 Adolf Siegfried に捧げる。デッサウで1819年聖ジルベスターの日に」³² と具体的に友人の名前が挙げられたことによってモデルがミュラー本人ではなく友人であるという説が裏付けられたと Hartung は述べる。Adolf Siegfried は、弁護士としてデッサウに居住していた。彼が友人のミュラーに自らの苦悩を話したことがこのチクルスの原型なのだと。しかし、モデル探しは根本的な問題ではない。この詩の成立には、1818年にルイーゼのカトリックへの改宗によって完全に決別したルイーゼに対するミュラーの苦悩や、ブリュッセル時代の体験をも必要としたからだ。モデルは友人でありそして同時にミュラー本人である。また、作品においてユダヤ人女性のキリスト教への改宗による楽観的な結末が暗示されていたとしても、当時の社会においていわゆる啓蒙主義的寛容による幸福な結末など現実的には難しいことであり、一般にそのことは社会的に周知の事実であったことはこの作品を理解する上で念頭に置かなければならない。ブリュッセル時代のミュラーの恋愛もまさにそうであった。

このチクルスは、キリスト教最大の祝祭の一つであるクリスマスで始まる。

クリスマスの夜 Christnacht

僕は窓を通してきらきら輝いているのを見ている、 Durch die Fenster seh' ich's flimmern,
緑と金とろうそくの光が、 Grün und Gold und Kerzenschein,
店からは歓声を上げながら Jauchzend hör ich durch die Laden
明るい子供達の声が叫んでいるのが聞える。 Helle Kinderstimmen schrein.

29 Garnot Gad: Wilhelm Müller. Selbstbehauptung und Selbstverleugnung. Diss. Freie Universität Berlin 1989, S. 99; 242, 245, nach Günter Hartung, Günter Hartung: Ebd., S.195.

30 Günter Hartung: Ebd., S. 195.

31 Luise Förster: Biographischen literarische Skizze aus dem Leben und der Zeit Karl Försters. Dresden 1846, S.171, nach Günter Hartung Günter Hartung: Ebd., S.200.

32 WMW, Bd. 1, S. 290.

．．．

でも静かな家の中には Aber in dem stillen Hause
お祝いの明るい炎は燃えておらず、 Brennt kein festlich helles Licht,
暗い色の普段着を着て、 Und im schwarzen Wochenkleide
彼女はそこに座っていて、喜んではない。 Sitzt sie da und freut sich nicht.

ああ、彼は彼女にとってはお生まれにならなかった。 Ach, ihr ist er nicht geboren,
この聖なる夜に、 Der in dieser sel'gen Nacht
喜びと平和と満足を Freud' und Fried' und Wohlgefallen
僕たちにもたらしてくれた人は。 Hat zu uns herabgebracht.

彼の愛、彼の苦しみは Seine Liebe, seine Leiden
彼女の中には入っていない。 Dringen nicht zu ihr hinein:
彼女の優しい心の上では Über ihre zarte Seele
石の法が支配しているのだ。³³ Herrschet ein Gesetz von Stein.

「クリスマスの夜」では、町の至る所でわきおこるクリスマスの喜びとは対照的に、キリストの誕生とは無縁な存在であるエステルEstherの異教性が強調されている。同時に「彼女の門は僕のために開いている」³⁴と作品中の私とエステルEstherの関係も暗示されている。続く「クリスマスの夜の祈り」(Gebet in der Christnacht)では Esterh は、救い主の誕生もまだ知らず眠っている「敬虔な羊飼ひ」³⁵ (eine fromme Hirtin) にたとえられている。キリストの愛は残念ながら彼女にはまだ伝えられていないのだと。エステルが敬虔な羊飼ひならば、彼女の心を支配するユダヤの「石の法」からいつかは解放されキリスト教に改宗するという楽観的かつ希望的な予測を意味している。しかし、次の詩「一体化」Vereinigung では、見かけ上ある種の譲歩が行われている。

一体化 Vereinigung

．．．

33 WMW., Bd. 1, S. 66f..

34 WMW., Bd. 1, S. 66.

35 WMW., Bd. 1, S. 67.

そして僕たちの心が Und unsre Herzen wollen sich begegnen

やっとの事で涙をこらえている長いまなざしの中で互いに出会おうとし、

In langen Blicken, die mit Tränen ringen,

そして僕たちの愛を天使が祝福しようとする。 Und unsre Liebe will ein Engel segnen:

天使は僕たちの周りで柔らかく心地良く翼をはばたかせる。

Er schlägt um uns die weichen, warmen Schwingen.

天使の名前について僕はあえて尋ねないし、 Nach seinem Namen wag ich nicht zu fragen,

彼を送ってきた人の名前も聞かない。 Noch nach dem Namen dessen, der ihn sendet;

僕は何度も泣きまた嘆いたってよい。 Ich darf ja wieder weinen, wieder klagen:

誓って言うが、僕を妄想なんかで幻惑したのではない³⁶

Fürwahr, mich hat kein eitler Wahn geblendet!

ここで作品中の「僕」は天使の名前も天使を送ってきた人の名前も尋ねないと言明し、ひとつの宗教に特定することにあえてこだわらない態度を取る。題名の「一体化」とは、恋人達の眼差しの中での心の「一体化」だけではなく、宗教的な「一体化」をも意味している。キリスト教共同体側からユダヤ教に対する優位性の視点はぼかされ、キリスト教を代表する福音書家の名前を持つヨハネスと旧約聖書のエステル記に記されたユダヤ人を虐殺から救った人物の名を持つエステルの関係、言い換えれば、キリスト教とユダヤ教の敵対関係が愛によっていわば妥協的に宥和されて、強引に一つに結びつけられた。次の「プリム祭」³⁷ (Purim) では、このユダヤ最大の祭りにもかかわらずその喜びから遠ざかっているエステルのもとへすべての束縛を捨てて行くことを夢想する。

...

おお、僕が荒々しく見せかけの O wäre ich aus dem Truggestalten

仮面の楽しみの幻影からぬけて、 Der wilden, blinden, Maskenlust,

仮面をはいで彼女の胸の寺院で Und dürfte meine Hände falten

僕の手を合わせる事が許されていたら。³⁸ Entlarvt im Tempel ihrer Brust!

結局のところ、因習的な束縛も宗教的な束縛も、「彼女の胸の寺院」で表現されるように官能

36 WMW, Bd. 1, S. 68.

37 ユダヤ人が3月14日に行う例年祭で、Hamanの手による虐殺からEstherの尽力によりユダヤ人たちが逃れたことを記念する。旧約聖書エステル記9章

38 WMW, Bd. 1, S. 69.

的な魅力の前で力を失い、キリスト教への改宗の主題が添え物的な役割になってしまっている。

彼女の窓の前で Vor ihrem Fenster

．．．

きみはこちらを見る。きみの目は Du schauest her: es wissen deine Augen

眼差しの甘い魔力について、 Vom süßen Zauber ihrer Blicke nicht,

いかに僕の眼がきみの眼から陶醉して吸い込み、 Wie meine sich aus ihnen trunken saugen,

その眼の光でだけ明るく燃えているかを知らない。 Und hell erglügen nur von ihrem Licht.

きみは、いかに僕の全生涯が Du ahnest nicht, wie sich mein ganzes Leben

月のようにきみの太陽の周りを回っているか知らずにいる。

Gleich einem Mond um deine Sonne dreht,

その月は誇り高い光を出して昇ろうとしたかと思えば、

Der bald sich will auf stolzen Strahlen heben,

低くかがみこんで涙に沈んでいく。 Bald tief gebeugt in Tränen untergeht.

静まれ、静まれ、僕の心よ。おまえの荒れた鼓動は何を意味しているのか。

Still, still, mein Herz! Was meint dein wildes Schlagen?

おまえの上を見ろ。空は遠くない。 Schau über dich, der Himmel ist nicht fern;

そして、星から落ちてくる炎が、 Und Flammen, die aus Sternen fallen, tragen

人間の吐息を主の玉座の前へ運んでいく。³⁹ Der Menschen Seufzer vor den Thron des Herrn

続く「彼女の窓の前で」においては、エステル之眼差しの魔力について、つまり官能的な魅力について語られている。自分は月のように彼女に隷属しているに過ぎないとさえ言うのだが、最期には唐突に「主」に救いを求めるように終わる。エステルの官能的な魅力に比べ、宗教はユダヤ教とキリスト教の間での力のはいらぬ綱引きをしているかのような印象さえ与える。次の「幕屋」(Die Lauberhütte) という題の詩では、振り子のように再びユダヤ教の領域に戻っていく。

．．．

ここで僕はやっときみがはつらつと輝いているのを見た。 Hier seh' ich erst dich blühen,

ここできみの世界が花開くのだ。 Hier blühet deine Welt.

．．．

きみは僕をじっと見ている、恋人よ、 Du siehst mich an, Geliebte,

39 WMW, Bd. 1, S. 70.

そして僕は言葉が出ない。 Und mir versagt das Wort:
あなたは Du wirst mich nicht verstehen
この魔法の場所で私を理解することはないだろう。 An diesem Zauberort.

どのようにしてきみは僕について Wie solltest du mir folgen
曇った、冷たい大気の中へ来るといなのだ、 In trübe, kalte Luft,
熱情と輝きと香りに満ちた Aus deinem Vaterlande
あなたの故郷から出て⁴⁰ Voll Glut und Glanz und Duft?

ユダヤ民族にとって象徴的な建物である「幕屋」⁴¹の中でエステルは再び輝き、やはり「僕」を理解できない遠い存在であることが確認される。しかし、次の「真珠の冠」(Der Parlenkranz)では、一転して「きみの頭の上で僕を泣かせてくれ。/ 涙が洗礼を施してはいないのかい。」⁴²(Laß auf dein Haupt mich weinen; / Tauft denn die Träne nicht?) といささか強引にヨハネスの幻想の中でエステルは洗礼を施される。キリスト教の領域におけるエステルの脱ユダヤ化は、マリア幻想で頂点に達する。

マリア Maria

マリア、僕はきみに挨拶したい、 Maria möcht ich dich begrüßen,
僕の心はいつもきみをそのように呼んでいた。 — Mein Herz hat stets dich so genannt.—
僕は澄んだ小川が流れるのを見ている、 Seh ich ein klares Bächlein fließen,
いつも僕は静かに川辺に腰を下ろす。 Setz ich mich still an seinen Rand:
マリア、小川の波はさらさら流れ、 Maria, rieseln seine Wogen,
マリアは彼女の名前にふさわしい。 Maria soll ihr Name sein;
白い小鳩が飛んで来て、 Ein weißes Täubchen kommt geflogen,
日の光の中で僕の上を飛び回っている。 Schwebt über mir im Sonnenschein.

恋人よ、きみは何も聞えなかったのか、 Geliebte, hast du nichts vernommen,
オルガンの音のように、滝のように。 Wie Orgelton und Wasserfall?
聖なるヨルダンが Der heil'ge Jordan kommt geschwommen
山と海を通して歓呼の声を挙げて流れきて、 Durch Berg und Meer mit Jubelschall.

40 WMW., Bd. 1, S.71f.

41 ユダヤ人たちがエジプト人から逃れた際 40 年間移動に使ったテントに由来する。

42 WMW., Bd. 1, S.72.

主の精神が彼の羽をはばたかせ Der Geist des Herrn schwingt sein Gefieder
そして呼びかける。僕の娘はどこ。 Und ruft: Wo ist die Tochter mein?
愛の満ち潮にひたれ。 Tauch' in die Liebesfluten nieder:
マリアはきみの名前にふさわしい。⁴³ Maria soll dein Name sein!

控えめに心の中でマリアと呼んでいたことが告白され、小川の岸に腰を下ろしている『美しき水車小屋の娘』を思い出させるような光景が描かれているが、キリスト教的なイメージの代表である白い鳩が現れると、のどかな小川はイエスが洗礼を受けたと言われる聖ヨルダン川に、エステルの洗礼のために突然変えられてしまう。これらの詩からは出来事が、いかにもヨハネスの心の中の希望的幻想であるような印象しか持つことができない。キリスト教の領域における描写はとくに現実的な説得力に欠けている。案の定、最後の詩「ヨハネスへ」(An Johannes)が『美しき水車小屋の娘』におけるプロローグやエピローグ⁴⁴の役割を与えられ、作者が作品中に登場することによって、そのはかない幻想からさえも読者は日常的な現実社会へと引き戻されるのだ。

ヨハネスに An Johannes

きみの胸から僕は高く歌いだした Aus deiner Brust hab ich empor gesungen
秘密の愛の炎の楽しみと苦しみを、 Verschwiegener Liebesflammen Lust und Schmerz,
そしてその響きから僕は今 Und von den Klängen fühl' ich nun durchdrungen
深い感動で、ほとんど僕自身の心が貫かれたのを感じる。

Mit tiefer Regung fast mein eignes Herz.
春は近い。すでに家から Der Frühling naht: schon trägt man aus dem Hause
花々は戸外の昼の光にもたらされている。 Die Blumen an das freie Tageslicht;
そして彼らの部屋にも Und länger bleiben auch in ihrer Klausur
僕のミューズの冬の花はない。 Die Winterblüten meiner Muse nicht.
．．．
かくて冬の花は五月の香りと輝きの中で退場する、

So ziehn sie aus im Duft und Glanz des Maien,
暗い悲しみと色とりどりの楽しみを花輪で飾って。

Bekränzt mit schwarzem Leid und bunter Lust;

43 WMW, Bd. 1, S.73. マリアがベルリン時代の理想化されたルイーゼのイメージと関連があることは、想像に難くない。

44 『美しき水車小屋の娘』におけるプロローグやエピローグの部分をももちろんシューベルトは作曲していない。

そして冬が冬の花に雪を振りかけようとするなら、 Und will der Winter sie mit Schnee bestreuen,
冬の花はきみの胸に逃げ帰る。⁴⁵ So flüchten sie zurück in deine Brust.

『美しき水車小屋の娘』は作品の冒頭で「冬に読むこと」⁴⁶ (Im Winter zu lesen) と指示され、悲劇的結末が暗示され、『ヨハネスとエステル』では「春に読むこと」⁴⁷ (Im Frühling zu lesen) と幸福な結末が暗示されている。『美しき水車小屋の娘』は、いわば世俗的ヴァージョンであり、『美しき水車小屋の娘』の直後におかれた『ヨハネスとエステル』はその宗教的ヴァージョンだと見ることができる。両者はその内容と構造からしても共通性を持っている。『美しき水車小屋の娘』はより皮肉に満ちているのだが、最後に作者自らの登場によって読者が冷水をかけられ、完全に夢からさまされるのは同じである。春の訪れとともに、物語自体が消えてしまう。エピローグでヨハネスとエステルの物語はこれらの詩の中だけの話ですよと念が押される。この作品はヨハネスの愛の苦しみや喜びを歌った「冬の花」だが、春となった今その役目は終わり、読者とともにすべては現実にもどる。もし読者にさしさわりがあるのなら、「冬の花」は、ヨハネスの胸の中に逃げ帰るのだと。ブリュッセル時代のせつばつまった悲壮感はもうここにはない。ミュラーのブリュッセル時代やルイーゼとの体験、さらに友人の体験もユダヤ人女性との幸福な結末など現実にはほとんどあり得ない社会のなかで、戯れの恋愛詩の題材になってしまった。

題材は晩年の作品に引き継がれる。その作品とは短編小説『デボラ』である。ミュラーは、経済的な成功へのもくろみもあって、当時かなりの需要が期待できた短編小説というジャンルに取りかかる。他の作品と同様に、この作品においてもミュラーは、自己の体験を様々な形で利用している。『デボラ』の主要な登場人物のひとりレルヒェンフェルス (Arthur Lerchenfels) と言うベルリンに住む医学生である。「彼の両親の唯一の (…) 生き残った」子供として「わがままに育てられ、自分を過大評価するように教えられ」⁴⁸、「いつか偉大な詩人に、その後さらに趣味の良い学者」⁴⁹ になることを夢見ている。彼は、ファニー (Fanny) という少女に思いを寄せ、彼女の母で彼の文学的趣味に興味を持つある枢密顧問官の未亡人の家庭に通うという無為な生活を長く送っている。学者として安定した職を得て豪華な馬車ででも乗り付けければ、もしかしたらその少女の母親は、彼の文学的な趣味を理解しているとは言い難い生意気な娘の求婚者として、歓迎してくれるのではないかと彼は期待している。しかし、いままで自分はおもてあそばれていたにすぎなかったと感じさせる顧問官夫人との不快なやりとりの後、

45 WMW, Bd. 1, S.74.

46 WMW, Bd. 1, S. 41.,

47 WMW, Bd. 1, S. 66,

48 WMW, Bd. 3, S. 407.

49 WMW, Bd. 3, S. 389.

彼はこの家には2度と足を踏み入れないことを決心し、ある公爵に付き添いイタリアへ旅立つ。それまでになんども公爵からは、公爵の費用で同伴者としてイタリアへ共に旅行しないかとの申し出をうけていたのを彼は断り続けていたのだ。

言うまでもないが、レルヒェンフェルスはミュラーの自己への皮肉をこめた分身とも言える人物である。このことは、ふたりの境遇の類似性からも明らかだ。ミュラーは、6番目の子として生まれ、全部で7人の子供のうち唯一成人に達することができたのはヴィルヘルムだけだった。このことも影響してか、父は、彼をあまやかして育て、当時、職人の息子としては異例のことであるが、あらゆる犠牲を払いベルリンで大学教育を受けさせている。解放戦争からのベルリンに戻った後のミュラーが思いを寄せるルイーゼとの関係そして彼とルイーゼとのあいだに生じた溝。ルイーゼと決別する契機となるプロイセンの侍従ザック男爵とのイタリアへの旅立ち(本来はギリシャの予定であったが)。それら多くの過去の体験が小説の骨組みとして取り入れられている。ファニーはルイーゼの兄で画家としても知られた Wilhelm Hensel と結婚した Fanny Mendelssohn を想起させる名前でもある。

イタリアに着いた後、けんか別れしたミュラーとザック男爵との関係のように、小説においてもレルヒェンフェルスと公爵の関係はしだいに悪化していくことになる。レルヒェンフェルスは、自由思想家を自称し、軽率に流行に反応し「カトリックを根本的に知ることなしに、内的な確信よりも詩的な傾向」⁵⁰ からカトリックへ改宗しようとする。公爵が1788年にたまたま王の任務でスペインに赴いていたときに、フランス革命が勃発し、家族と財産を失った公爵は革命に関するすべてのことを憎み、いまだに王制下の貴族の服装や習慣を守り続け、ナポレオン法典や新しい世界の秩序を忌み嫌っていた。しかし同時に彼は宗教的な事柄においては、啓蒙的な思想の持ち主で、「教会の教義に信仰告白しない理神論者」⁵¹ であり、「カトリック教会の考察において悪しきボルテール (Voltaire)」⁵² と一致しているという点では、むしろミュラー本人に近いものがある。

ナポレオンの軍と戦ったミュラーが、ベルギーでユダヤ人とおぼしき女性と恋愛問題をおこしたことが反映しているかのように、公爵は王制支持者たちの軍と合流したときスペインのヴァレンシアで美しいユダヤ人女性と知り合う。その女性はデボラと称し、ペルピニャンから来た律法に忠実なユダヤ人アーロン (Aron) の妻で、娘を出産したばかりであった。⁵³ アーロンは「国 (スペイン) の条例が周知のごとくどのユダヤ人にも国境への立ち入りを禁じていたから」、⁵⁴ 偽名でフランスとスペインの間の物産取引を行っている商人であった。

50 WMW., Bd. 3, S. 409.

51 WMW., Bd. 3, S. 409.

52 WMW., Bd. 3, S. 410.

53 ブリュッセル・ソネットの「オレステス」の母のイメージと関係があるのかもしれない。

54 WMW., Bd. 3, S. 451.

「…彼女（デボラ）は不幸にも、粗雑で情念的な夫の枷の中にいた。この夫に彼女の両親が彼女を一個の商品のように売りつけていたのだ。彼女は長い間、彼女の創造主のなかに、厳しい王でなく優しい父を崇めるといふ心の秘密の衝動を感じていた。彼女はキリスト教徒になっていただろう、そして神と人々の前で私のものになっていただろうに…」⁵⁵

公爵はデボラを深く愛し、彼女のカトリックへの改宗と公爵の彼女への愛は成就するかにみえた。その時、ある高位のスペイン使節の妻である Donna Clara de Floridas のたくらみで異端審問が介入した。Donna Clara de Floridas は公爵に目をかけていたのだ。デボラがキリスト教徒を愛の媚薬によってわいせつな行為に誘惑したとの Donna Clara de Floridas の訴えによって、デボラは、牢獄につれられ拷問によって死んだ。デボラの死を聞くや痙攣をとまなう狂気と死の淵から目覚めると公爵の頭は「白髪」⁵⁶になっていた。それ以来、公爵の頭の中はいつもデボラへの追憶で満たされ、デボラと最初の出会った場所に似せて作った小さな寺院を持ち歩き、その祭壇の前でデボラの細密画とともに、毎晩祈りをささげていた。

イタリアに着くと最近おきた未解決の殺人事件の噂を聞く。神学校の生徒で若いスペイン人の絞殺死体がローマでユダヤ人のゲットー Ghetto degli ebrei の近くの川のなかで発見されたのだ。ローマではカトリックの通俗本が、この事件に関連して「ユダヤ人に対する罵りとユダヤ人を改宗させるか根絶やしにするかせよとのキリスト教徒に対する要求」⁵⁷を書き立てて大衆を煽っている。疑われているのは、ゲットーに住む年老いたユダヤ人。被害者は、この男の娘を「愛から信仰へ導いたのか信仰から愛へと導いたのかは」⁵⁸わからないが、愛と信仰によって改宗させようとしていた。公爵はこの殺された男の名前を偶然耳にする。Don Alonso de Floridas である。スペインでデボラを死に追いやる原因となった Donna Clara de Floridas との関係は明らかだ。殺したのは、自分が愛したデボラの夫アーロンであろう。

「神よ！神よ！それは汝だ！……お前は恐ろしく罪のない子供達や子供の子供達に対して彼らの父や母たちの罪を罰するのか？」⁵⁹

彼は、卒中で倒れデボラの肖像画を枕元にして死ぬ。

一方、レルヒエンフェルスは、子供のころの体験の思い出に苦しめられていた。ワイン畑のなかでのかくれんぼで、彼はミンナ（Minna）という名の少女とふたりだけになっていた。レ

55 WMW, Bd. 3, S. 452.

56 WMW, Bd. 3, S. 454. 白髪、星その変形である太陽、小川、花はミュラーの作品で常套的に用いられる表現である。

57 WMW, Bd. 3, S. 418.

58 WMW, Bd. 3, S. 475.

59 WMW, Bd. 3, S. 432.

ルヒェンフェルスがブドウの葉にキスをしてその葉がミンナの頬に触れた。それ以来、彼らはたがいに花婿と花嫁と呼び合い、毎日キスをした。彼はその葉を「聖遺物として」彼の聖書のなかにはさんで保管していた。⁶⁰「それがその後、本もろともなくなるまで。」⁶¹ふたりの関係は過去のものになったが、それ以来レルヒェンフェルスの夢の中で、ミンナが魔女ローレイ「Nixe Lurelei」としてライン川から姿を現し彼から誠実のあかしを要求するようになった。夢の中で、レルヒェンフェルスは、「絶望的に喜びと苦悩のうちにボートから波立つ深遠へと転落した。」⁶²彼が公爵の部屋で細密画を見てそれを感激して胸と唇に押し当てたとき「今、彼はそれをローレイ（Lurelei）と呼んだ、それから再びミンナと、それから彼の混乱した幻想は彼の思い出や夢のなかのイメージとその絵の共通性を手にいれた。」⁶³

レルヒェンフェルスは、ゲットーにアーロンの娘でデボラという、母と同じ名前を持つ女がいることを知る。殺されたスペイン人が持っていた十字架像の前で、デボラが祈っているのを壁の隙間から覗いたとき、彼は思った。「これはデボラだった。彼の愛の偶像の生身の原画なのだ、…これはミンナだった。ローレイにしてマリアだ。Arthur（レルヒェンフェルス）の最初の眼差しがそれをこのひとつの顔で認識したと思いこんだ。」⁶⁴彼は、デボラの中にミンナとローレイに表現されている官能の愛とマリアに代表されるカトリックの宗教性を同時に見たのだ。彼は、神の意志が自分をベルリンからデボラのもとに導いたのを感じ、デボラをキリスト教に改宗させて妻にすることを決心する。だが彼がふたたびゲットーにもどったとき、父親も娘もいなかった。デボラは、祈りを捧げているところを父親にみつき、ナイフを投げつけられ修道院病院に引き渡されていた。アーロンは、殺されたスペイン人の十字架像が発見されたため、投獄されて裁きを待っていた。デボラは、修道院病院で聖餐と病油を授けられた後に死んだ。

レルヒェンフェルスは、狂気から目覚めるとカトリックに改宗し、修道僧として瞑想の日々を送ることになる。「ミンナ、ローレイ、デボラとマリアは、同じ天の光の様々な光線にすぎない、その光の見えない中心には永遠の愛の女王が君臨している。」⁶⁵とレルヒェンフェルスは言う。すべては「たった一つの愛」⁶⁶にすぎないと。

ベルリンでの10月15日の日記で夢想された天上的な愛と地上の愛の一体化が、ここでなしとげられた。ブリュッセル時代のテレゼの官能的な愛によって、続くベルリン時代のルイーゼへの精神的な愛によって、またそのふたつを一体化しようとすることによって、いずれの場

60 「ブリュッセルでの愛ともっと昔のまだ僕に残っている思い出の品をながめた。」WMW, Bd. 5, S. 13. との関連性。

61 WMW, Bd. 3, S. 401.

62 WMW, Bd. 3, S. 402.

63 WMW, Bd. 3, S. 443.

64 WMW, Bd. 3, S. 464f..

65 WMW, Bd. 3, S. 477.

66 WMW, Bd. 3, S. 476.

合にもミュラーは深く傷ついた。その心の傷は、この小説の中においては解消されている。ただし、皮肉な視点を持って。悲壮感は皮肉に変化し、カモフラージュされ、より客観化された状態で商品としての題材とされてしまう。ブリュッセル時代のソネットの直接性から『ヨハネスとエステル』を経て『デボラ』において素材はますます分解され再構成される。⁶⁷ 公爵とレルヒェンフェルスは、一見ザック男爵とミュラーにそれぞれ相応するモデルを求めているように見えるが、両者の特徴はここで解体され混ぜ合わされ、実は両方ともミュラー本人の分身ですらある。聖書にはさんでとっておいたミンナとの思い出のぶどうの葉とテレーゼへの思い出の巻き毛の関連のように、ミュラー本人との直接的な結びつきが強いものもあれば、レルヒェンフェルスのカトリックの改宗のように、様々な対象が推測される場合もある。

宗教に関しても、世俗的なローマカトリックへの皮肉だけでなく、キリスト教徒やユダヤ人の宗教的偽善性など様々な要素が複雑に絡み合っている。例えば厳格なユダヤ教徒であるアーロンは、そのうらでは、キリスト教徒と結ぶ悪辣な商人として描かれている。しかし、このユダヤ教徒だけが批判の対象とされるのではない。アーロンは彼よりさらにずるがしこいキリスト教徒によって全財産をだまし取られ、ゲットーに身を落とすことになったとされているのだ。

『ブリュッセル・ソネット』のテレーゼの体験は、その Therese という名前が『ヨハネスとエステル』の Estehr や Debora の本名 Theodra のアナグラムであることが暗示するように、ミュラーの生涯関わるテーマである。同じ素材を使いつつ、『ブリュッセル・ソネット』から『ヨハネスとエステル』さらに『デボラ』と経るにしたがい、主観的な没頭から客観的な観察と再構成へとミュラーの創作態度は変化している。『デボラ』が小説であることを考慮しても、素材への冷静な距離が生じているのだ。あるいはこの創作態度の変化が、短編小説という形式を選ばせたひとつの原因かもしれない。

(本学講師＝ドイツ語担当)

67 1826年夏に保養地 Franzensbad で会ったプラハから来た美しいユダヤ人 Logis も『デボラ』に、影響を与えているだろう。彼女は富裕な商人の夫人で、ミュラーは彼女にいくつかのエロティックな詩を捧げている。